

瀕死の息子が身で説き、私の「いのち」の使い方を示してくれた。

世田谷教会 坂本恵世さん

平成22年の夏、恵世さんの長男の浩佑さんがオートバイ事故を起こし、頭蓋骨骨折と脳挫傷で意識不明となってしまう。病院の集中治療室で付き添い、先の見えない不安に押しつぶされそうになりながらも、一心にわが子の回復を祈り続けた。そして、事故から11日目、浩佑さんが目を覚ます。目を開けて、少しだけ手が動く。そんなささやかな動作が、まるで奇跡が起きたかのように有り難かった。目を追うごとに、話す、笑う、歩く…など、できることが一つひとつ増えてくる。その姿を目の当たりしているいのちの尊さ、いのちのはたらきの有り難さという本質に気づき、恵世さんは自分のいのちの使い方を見つめ直した。そして、ありのままを受けとめ、慈悲・思いやりの心で人とふれあおうと決意する。連れ合いを亡くして悲しんでいる人や病気で苦しんでいる人には、どうすれば心により添えるかと心を砕き、老夫婦だけの家庭があれば手料理を持参し話に耳を傾ける。いま、恵世さんの笑顔は、多くの人のいのちを輝かせている。



ありのままに観る

私たちは、花が咲くと「ああ、きれいだ」「うれしい」と喜び、花が散ると「残念だ」「寂しい」と嘆きます。このような人間の情緒は、ときに苦悩の素になります。できれば感情をまじえず、ものごとを素直に、純粹に受けとめること、すなわち「ありのままに観る」ことが大切です。しかし、それを頭で理解できても、感情の整理がつかないというのが私たちの実態でしょう。「ありのままに観る」ことのむずかしさがここにあります。仏さまの教えは、智慧と慈悲といわれます。真理を観る智慧と同時に、慈悲・思いやりの心で人とふれあうことです。目、目の現象はありのまま見定め、一方では思いやりの心を發揮して自他ともに幸せに——それが、私たちのめざす菩薩の生き方といえるのです。

立正佼成会